

Japanese Working Class Artist ~ RYO KANZYU



短い物語P&D

誰も知らないまま



ORIGINAL
SINGLE

「誰も知らないまま」 (1 / 2)

ある日、野球好きの男が球場へ向かって歩いていた。

サラリーマンから抜け出して四年。

男にはずっと晴れの日がない。

どうやら今日も雲行きは怪しくなった。

なぜなら、ゲートを見上げる場所まで来てから、チケットを落としたことに気付いたからだ。

どこか抜けている自分に薄ら笑いを浮かべ、男は球場と空を見上げた。

その時だった。

靴の先端に何かが当たった。

右足の外側。

転がってきたのは硬球だった。

一瞬ホームランボールかと思ったが、そんなはずはなかった。

誰かの落とし物のようだったが、それらしき人は見つけられない。

男は五本の指先で執拗に固さを確かめ、ポケットにしまった。

そして、試合観戦は諦めたのか、ドームとは反対の方向へ歩き出した。

当日券売り場の横を通り過ぎ、人の流れに逆らうように駅の方へ向かった。

慣れない都会では、歩くテクニックが必要。

手持ちが寂しければ、なお工夫がいる。

試合を観ることだけが目的だった男は身軽だった。

開き直った気分で帰路を修正した。

その途中でバッティングセンターに惹かれた。

錆びた金網とくたびれたネット。

汚れた自動ドアは、誰も通す気がないように思える。

男はジーンズのポケットに右手を突っ込み、硬貨を触りながら店内に進んだ。

カウンターは無人。

客の気配はない。

両替機の横では、使い古されたボールの袋詰めが売られている。

摩耗が酷すぎても、それらはお買い得。

男は買って帰ろうかとうと考えた。

男は打つよりも投げたかった。

いろいろ投げ出して来た自分には相応しいと、ふと考えた。

ピッチングコーナーの機器は古く、正確に計測してくれるのか怪しかった。

1プレイ12球。

まずは肩ならし。

八割くらいの力で投げた第一球目は98km。

同じように投げた第二球目は97km。

ちょっとだけフォームを気にした第三球目が99km。

男は100kmを超えてやろうと熱くなった。

夏の終わりは近かったけれど、これから流れる汗が無駄だとは思えなかった。

男は休憩を挟むことなく、3プレイ目に挑んだ。

その結果、男は目標を達成した。

37球目、スピードガンの表示は105kmを示した。

約18メートル先の的に当たってボールが転がる。

男にとって久しぶりの笑顔。

しかし、すぐに表情は曇った。

原因は肩痛ではなくて、予期せぬ異変。

ストライクゾーンを示した的が、震えるように揺れている。

始め男は地震だと思った。

それが違うと分かると、次は時分の視神経の異常か、めまいの類いだと考えた。

けれど、それはどちらも間違いだった。

ピッチングコーナーの空間全体が何かおかしい。

怖くなってきた男は、やがて動けなくなった。

固まってしまった。

生きてはいた。

そのまま無音が続く。

そして、マウンド上から男の姿が消えた。

最後に投げたボールも消えた。

そのボールは、球場の前で男が拾った硬球だった。

